

小さなエコの大きな意味と信仰

すべてのいのちを守るために

吉川 まみ
上智大学教授

⑤ 小さなエコを家庭から

10月は「食品ロス削減月間」

気候危機と人類の転換点 (ティッピングポイント)

最近、しばしば見かける「ティッピングポイント」(転換点)という語は、物事がある一定の条件を超えると一気に広がる現象を指します。グリーンランドの水床融解をはじめ、永久凍土の融解、南極氷床の融解、熱帯林の破壊などが人間活動によって相互連関的に影響を及ぼし合い、この転換点を過ぎると気候変動の問題が加速すると言われています。

パリ協定の目標、温暖化を2℃以下、可能な限り1.5℃以下に抑えるというのは、1〜2℃の気温上昇でティッピングポイントを過ぎると予測されているからです。こうした状況について国連は、もはや気候変動の問題ではなく気候危機だと表現しています。

一方で、人類全体が諸活動をエコロジカルに変えていく転換点があるとも言えます。かつて、エコ

実践は自然保護や自然科学に携わる一部の人間だけの関心事でした。最近では、この地球上に暮らすすべての人々が、何らかの環境配慮が求められてしかるべきだと考えられるようになってきました。

すべての人にとっての

地球環境保護

教皇フランシスコは、信仰者にとって環境を守ることが神の創造を守ることにつまり、すべてのいのちを慈しむ創造主のまなざしに心を合わせる信仰の次元だと述べて、すべての人にやさやかなエコ実践を繰り返す呼びかけをしています。

とはいえ、例えばグリーンランドの水床融解をくい止めようと言われたところで、あまりにも壮大で、温暖化の原因と結果は複雑で、何が環境への配慮になるのか分かりません。ですが、あらゆる物質が循環する地球のバランスを守るために、少なくとも私たちの日常生活の中で一人一人がやさや

かにエコ実践することはできません。その一つがまず捨てる物の量を減らすことです。それは消費と不可分のつながりにあるからです。

食料廃棄の問題

今回は、食生活のゴミ問題―食料廃棄問題について、一人一人のエコが必要なことを意識してみたいと思います。世界中で生産された食べ物の3分の1に当たる年間約13億トンの食糧が食べられずに捨てられていることはよく知られ

ていますが、特に日本の家庭からの食料廃棄量が多いことはあまりよく知られていません。

「食品ロス削減関係参考資料」

(令和5年版)によれば、まだ食べられるのに廃棄される「食品ロス」は523万ト。これは、日本全体で毎日大型10トトラック約1433台分の食べ物を廃棄していることとなります。年間1人当たりの食品ロス量は42kgで、毎日おにぎり1個分(114g)の食べ物を365日捨て続けている計算です。10月は「食品ロス削減の日」です。今、日本では政府が商慣習や消費者の過度な鮮度志向などを改めるため、製造・配送・販売の連携や消費者の理解の促進などフードチェーン全体での

取り組みを進めています。

エコ実践の原点としての

家庭と創造への感謝

私たちは、家庭での衣食住を中心に、日々あらゆる場面で常に何かを消費しながら暮らしています。物がどこからどのようにやって来たのか、それらをいかに扱い、要らなくなった物をどのように手放し、自分の手を離れてどのように自然に循環していくか。そんな目に見えない「物の一生」に思いを馳せられるか否かは、学校の教室で環境問題についての知識を吸収するだけで身に付くものではないでしょう。何気ない立ち居振る舞いから消費生活まで、日頃の家族との暮らしの中で私たちの物との関わりも育まれていきます。

教皇は、「家庭」の重要性について次のように述べています。…家庭が非常に重要であることをここで強調したく思います。…わたしたちはまず家庭の中で、いのちに対する愛と敬意の示し方を学び、また、物を適切に利用すること、整頓することと清潔にすること、地域の生態系を尊重すること、すべての被造物を気遣つことを教わりま

す。…(回勅『ラウダー・シ』213)

いのちを頂く感受性を家庭から
新型コロナウイルス感染症が感

染症法上5類に引き下げられ、当たり前日常生活やそれを支えるエッセンスワーカー(人々の日常生活を維持するために必要不可欠な仕事の従事者)の方々の感謝の気持ちも希薄になってきました。小さなことをありがたく思い、感謝できなければ、日常生活の中からのやさやかなエコはできません。コロナウイルスという一つの危機は、私たち自身のいのちも含めて、すべてのいのちが今ここに存在することへの感謝の大切さを教えてくれました。

教皇は回勅の中で、私たちが浅はかで粗暴で衝動的な消費者にする、あの病的な不安に打ち勝つ道を示してくださったと、次のように述べています。

こうした姿勢の表れの一つは、食前食後に手を止めて神に感謝をささげることです。わたしは、すべての信者に、この美しく意義深い習慣に立ち帰るようお願いいたします。食前食後の祈りは、わずかな時間であっても、わたしたちのいのちが神の手の中にあるというのを思い起こさせてくれます。それは、被造物という贈り物への感謝の思いを強め、それを提供してくれる人々の労働をありがたく思い、困窮の極みにある人々との連帯を再確認する時なのです。(同227)



(カット=安藤みちこ)